

4技能を統合的に指導することについて ～スピーチ活動(校内英語弁論大会)の取組より～

岩 崎 香 織

はじめに

平成20年3月に告示された学習指導要領が移行期間を経て、平成24年度より全面実施されている。この学習指導要領の改訂について、中学校外国語科(英語)では、基本的には指導内容そのものに大きな変更はないが、小学校で外国語活動が必修化されたことに伴って「聞くこと」「話すこと」を重視した目標から「読むこと」「書くこと」を加えた4技能の総合的な育成を強調した目標となり、指導する語数を「900語程度まで」から「1200語程度」に増えたこと、教材の題材の例として「伝統文化」と「自然科学」が加わったことが改訂点として挙げられる。つまり、今回の学習指導要領の改訂の趣旨は、以下の4点であり、平成24年度からの全面実施を視野に入れ、移行期間中からその趣旨を踏まえながら指導をしてきた。

- 4技能の総合的な育成を目標とする
- 小学校での外国語活動を踏まえた指導をする
- 知識・技能の活用を図る言語活動を充実させる
- 語彙の充実を図る

また、改訂の基本方針のもととなった外国語科の課題として、平成20年中央教育審議会の答申で次の4点が挙げられている。

- ①社会や経済のグローバル化の急速な進展に伴い、単に受信した外国語を理解することにとどまらず、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」の育成がより重要となっている。
- ②中学校・高等学校を通じて、コミュニケーションの中で基本的な語彙や文構造を活用する力が十分身に付いていない、内容的にまとまりのある一貫した文章を書く力が十分身に付いていない状況なども見られる。
- ③英語が大切、普段の生活や社会に出て役に立つと考えている生徒は、他の教科に比べて多いのに対して、学年が進むにつれて英語が好きな生徒は減少する傾向が見られるとともに、中学校において、授業が分からない生徒の割合が他の教科と比べて高い傾向が見られる。
- ④高等学校については、「英語Ⅰ」において、文法・訳読が中心となっている。また、「オーラル・コミュニケーションⅠ」において「聞くこと」「話すこと」を中心とした指導が十分になされていない実態があるなど、4技能の指導において偏りがあるとの指摘がある。

「英語の勉強は好きだ。」と答える生徒は多いが、学年が上がるにつれて、学習意欲が低くなる現状がある(平成24年度島根県学力調査報告書)。本校の生徒達にアンケート調査を行ったところ、大多数が将来的に英語は必要不可欠であると考えている。英語の学習は好きではないが、必要であるから学習する。そして学習するからには「英語ができる」ようになりたいと考えている。それゆえ生徒達にとって1時間1時間の授業を爽りのあるものにする事、つまり、小学校外国語活動で育まれた素地をいかし、伸ばしながら上級学校で通用する英語運用能力を身に付けさせる指導が中学校英語教育には必要となるわけである。生徒の考える「英語ができる」とは、他者からの英語の情報を聞き取ったり、読んだりして理解できること、自分の思いや考えを英語で話したり書いたりすることができる

ということである。確かな受信と発信のために、基本的な語彙や文構造を日々の授業で定着させ、活用できるようにする指導が求められている。

自らの考えなどを他者に伝える場として、本校では3学期に校内英語弁論大会がある。生徒は事前に準備をし、練習を重ね、全生徒が学級で発表し、その代表者が学年大会を経て校内大会へと進む。この英語弁論は、上記①、②の課題を実際の指導でどのように解決できるかをみとるのに適する学習課題であると考えた。4技能の統合的な指導と合わせて、英語弁論大会で自分の考えや思いを発表できる意見文を作り上げることを目指して授業を構想した。

1. 研究の仮説と視点

(1) 目指す生徒の像

基本的な語彙や文構造を活用して、自分の考えや思いを発信できる生徒の育成を目指したい。その際「発信」とは、自分の気持ちや考えを優先させるだけでなく相手に対して配慮をしたり、自分の意見を通すにしても相手にわかりやすく伝えたり、自分なりのものでもいいので、相手の同意を得るのに十分な理由を示しながら意思表示をすることであってほしいと願っている。

そこで、他者への伝わりやすさという点から、伝える内容について構成面(主張が明確であるか。主張を支える理由があるか。)・表現面(適切な語彙。話すスピード、声の大きさ。相手を意識した話し方であるか。)の両面を生徒に意識させたい。

(2) 研究の仮説

自分にとって身近なトピックについて自分なりの意見を持ち、友だちと対話する活動を続け、その対話を他者にモニタリングしてもらい、その結果をグループ・学級全体で共有する活動を、段階を追って仕組んでいけば、コミュニケーションの中で自らの考えなどを相手に伝えるための「発信力」が育成されるだろう。

この発信力を構成面と表現面の両面から指導していく。構成面について指導する中で「書くこと」・「読むこと」、表現面について指導する中で「話すこと」・「聞くこと」を重点的に指導できると考える。この養った発信力を用いて、学年末の英語弁論大会でスピーチすることができるだろう。よって、次の視点に立って授業作りを行った。

- 視点① まとまりのある文章を「読むこと」に慣れ、文章の構造を理解させる
- 視点② スモールステップで「話すこと」・「書くこと」に慣れ、よりよい表現活動につなげる
- 視点③ 意見文の分析を通して「話すこと」・「聞くこと」を生徒同士で高め合わせる

(3) 研究の視点

まとまりがあり、かつ他者にわかりやすい文章を書くためには、どのような文章が他者にとってわかりやすい文章・内容が伝わりやすい文章であるかということを書き手が理解していなければならぬ。よって視点①については、ある程度の長さの文章を読んで、文章の構造について考え、それぞれの文が文章の中でどのような役割をもっているかに着目させる。

小学校での外国語活動に慣れ親しんだ生徒達は中学校で本格的に英語の学習を始める。「聞くこと」・「話すこと」への抵抗はあまりないと考えられるが、多くの人の前で自分の考えを英語で発表するとなると苦手意識をもつ生徒もいるだろう。校内英語弁論大会は学年で目安の量が設定されており、1年生では10文程度、2年生では15文程度、3年生では20文程度と学年が上がるにつれて量が増える。

それと同じように、視点②については、与えるトピックを生徒にとって自分の考えをもちやすいものからスタートし、ペアでの対話の時間を短く設定して負担なく話すことに慣れさせたい。

また、イメージマップを使って自分の考えを整理しながら書くことにも慣れさせたい。最終的にはトピックを与えなくても、3年生での校内英語弁論大会において、中学校3年間の学習で身に付けた表現力や文章構成能力を活かして、自分の主張を聴衆に訴えかけられるようになってほしいと考えている。

県学力調査の結果によると、本校の生徒達は「聞くこと」・「読むこと」・「書くこと」についてのどの領域もほぼ均等に力を伸ばしてきていることがわかった。特に「書くこと」に関しては正確性があり、普段の授業からも発展的な内容についても積極的に学習に取り組み、自分で辞書を引き表現を工夫する姿が見られる。しかし、そこでつけた語彙や表現をいざ「話すこと」で発揮できるかという点、自信をもって話すことが難しいと感じている生徒は少なくない。実際にALTとのインタビューテストを行った際にも、ALTの話の内容は何となく理解ができるが、それに対する返答として自分の話す内容は適当なのか、また自分が伝えたいことを伝えるにはどのような表現が適切なのかと自信なさそうにしている生徒も見られた。

そこで、視点③については、自分の書いたことを多くの人の前で話す前に自分自身と友達とのダブルチェックを行うことによって「話すこと」に自信をもたせるとことをねらいとする。また、伝える内容についてのチェックに加えて、話す際の表情、声の抑揚などを工夫させることはもちろんであるが、自分のパフォーマンスについて友達から意見をもらう(他者とかがわり合う)ことを通してよりよい表現活動を実現させたい。

2. 研究の実際

*New Horizon Book 2 Unit 5 A Park or a Parking Area?*をもとに、「自分の意見を相手にわかりやすく伝えよう」というテーマで、スピーチ原稿を作り、友達の前で個人のスピーチについてグループでアドバイスし合った内容を学級全体でさらに共有させてから再びスピーチを行うという単元の終末課題を設定して研究を進めた。以下のように単元を計画した。

次	主な学習	時	具体的な学習・内容
1	何が起きたかを正しく読み取り、それについての意見を述べよう。	1	・接続詞ifを含む文の意味や構造およびその運用について理解する。 ・接続詞ifを用いて自己表現活動を行い、友だちと話す。
		2	・接続詞thatを含む文の意味や構造およびその運用について理解する。 ・接続詞thatを用いて自己表現活動を行い、友だちと話す。
2	新聞記事を読んで、自分の意見を友だちに伝えよう。	3	・接続詞whenを含む文の意味や構造およびその運用について理解する。 ・接続詞whenを用いて自己表現活動を行い、友だちと話す。
		4	・接続詞becauseを含む文の意味や構造およびその運用について理解する。 ・接続詞becauseを用いて自己表現活動を行い、友だちと話す。
3	相手に伝わりやすい文章を考えよう。	5	・教科書p. 52-53をモデルに、文章構成を分析する。
		6	・サンプル文章をわかりやすい構成にする。
		7	・与えられたテーマについて自分の考えを組み立ててスピーチし、録音する。
	友だちと意見交換をして、自分の意見をより相手に伝わりやすい表現にしよう。	8	・友だちとスピーチを聞きあい、より相手に伝わりやすい表現にする。 ・アドバイスをもとによりよい表現を心がけ、同じトピックについて再度スピーチをし、録音内容をもとに自分の表現の高まりを実感する。

(1) 視点①まとまりのある文章を「読むこと」に慣れ、文章の構造を理解させる

様々なまとまりのある文章を読むことによって、ある程度の長さのある文章を読み内容を理解することに慣れるとともに、文章がどのように書かれているかを理解することができる。教科書では新聞投書が扱ってあるが、後に生徒が書く意見文、スピーチ原稿と文章構造がほぼ同じである。つまりパラグラフごとにトピックセンテンス(主題文)、理由などの支持文、結論からなる。よって内容理解を済ませた教科書本文から文章構成の分析を行い、その文章で伝える内容について構成面でのアドバイスができるように順に課題に取り組みさせた。この課題を通してわかりやすい文章・相手に伝わりやすい文章とは何かに気付かせることができると考えた。

[課題1]教科書本文の文章構成の分析

教科書p.52-53をモデルに、文章構成を分析する。新聞記事とその記事に対する投書を読んで、トピックセンテンス、支持文、結論のどれにあたるかを考える(図1)。記事・投書とも内容をよく確認した後での課題だったため、ほとんどの生徒が間違いなく文に下線を引くことができていた。

[課題2] サンプル文章をわかりやすい構成にする-①

『都会と田舎、住むならどっち?』というテーマで生徒にペアで対話をさせたあと、あらかじめ教師がつくったサンプル文章を短冊状にしたものをグループごとに渡して、どのような文の順がわかりやすいか並べかえる課題を行った。直前に同じテーマについて自分なりの意見をもってペアで話し合っているため、理由について想像しやすかったようだ。新聞記事や投書で行った分析を思い出して、「まず自分の主張から言わんと。」「結論は最後だよな。」などと話しながら文の並べかえを行っていた。

また、『16歳以下の子どもへのテレビ視聴制限』というテーマで話し合い活動をしているグループの様子を書き出したシートを生徒に与え、A~Dそれぞれの主張に対して主張がはっきりしているか、理由が挙げられているか、またその理由が他者に納得される根拠あるものとなっているかを読み取る課題を行った(図2)。それまで、理由の正当性にまで考えが及ぶことはあまりなかったが、わかりやすい・伝わりやすい主張にするためには誰にでも理解される理由が必要であるということに気付くことができた生徒が多かった。また、主張を支える理由として不十分なものに対して、書き換えのアイデアを添えている生徒もいた。

[課題3] サンプル文章をわかりやすい構成にする-②

課題2を経て生徒にはわかりやすい・伝わりやすい文章に仕上げるために必要なことがわかってきた。どのような順で自分の主張を述べるか、また主張を確かなものにするためには、客観性のある理由が必要であるということである。そこで、生徒から挙げられた、わかりやすい・伝わりやすい文章に必要な項目やそれらを表現する際にどのような文で表現するといったかをまとめたものを一覧にし、再度サンプル文章の構成を分析する課題を設定した。

『16歳以下の子どもへのテレビ視聴制限』で下線を引こう

A New Parking Area for Bikes

Midori Park will become a parking area for bikes.

People complained when a bike fell on a little girl (Isbii Kumi) near the station.

They asked the city for a new parking area.

But some people are against the plan.

They think they should keep the park.

A park or a parking area ... that is the question.

OPINIONS

I read about the new parking area plan. It is bad news.

I am against the plan because we need our parks.

I know we have a problem with bikes. But we can keep our parks if we change our habits. Remember that the accident taught us an important thing.

We can do two things:

1. Walk when we don't have to ride our bikes.
2. Be careful when we park our bikes.

Jackie Popper

図1 教科書本文の文章構成の分析用シート

Let's TRY!!

②Read the dialogue below. For every person (A,B,C,D), please answer these questions:

- I. What is the major (opinion or conclusion) of this person about children watching TV?
- II. Does the answer have some reasons in it or not?
- III. How many reasons are given? Please underline the reasons and count them.
- IV. In your opinion, are these reasons good enough to convince people? Why or why not?

Some scientists say we should not let children watch TV, or let them watch very little TV before 16 years of age. What do you think: should we stop or limit children's TV watching before 16 years of age?

- A. Of course! I think scientists are always right!
- B. I am against these scientists. I love watching TV. All kids love TV! TV is wonderful for relaxing and entertainment!
- C. I am also against scientists, because TV has a lot of good shows and children can learn a lot of things from TV!
- D. TV is good for children! They can see many things on TV. They can't learn only from books. Children can't find or read all books, but the TV can teach them things when they can't have the books about it. Also, children can learn about the world and see very interesting images on TV. And they can learn about the art of movies, too! Aha, I think TV is good because it can show us moving things.

A I. II. III. IV.	B I. II. III. IV.
C I. II. III. IV.	D I. II. III. IV.

図2 意見の構成の分析用シート

相手に伝わりやすい文章に必要な項目

- ・自分の考え(主張) ・主張を支える理由
- ・理由を支える例(なるべく具体的なもの)
- ・結論

課題2と同様に、『修学旅行、バスで行く？電車で行く？』というテーマについてペアで対話をさせた後、同じテーマのサンプル文を読み、理由とそれを支える例が十分であることを個人で考えた後、ペアで確認し合った。

だんだんと生徒はこのような活動に慣れ、どの文がどのような役割の文であるか、自分ですぐに色分けして下線を引くことができていた(図3)。

課題1から課題3までいろいろなテーマの文章を読み、その構成について考えたことで、生徒はわかりやすい・伝わりやすい文章とはどういったものかという具体的なイメージをもつことができたと考える。特に自分の主張を支える理由について十分なものと不十分なものについて見極める視点が定まってきたので、以下のように整理して学級全体で共有することができた。また、それらの文章の中にはその後の表現活動に利用できる主張や支持文が含まれているので、独力で英作文することに困難を感じる生徒にとっては実際に意見文を書く際のヒントにもなっただろう。

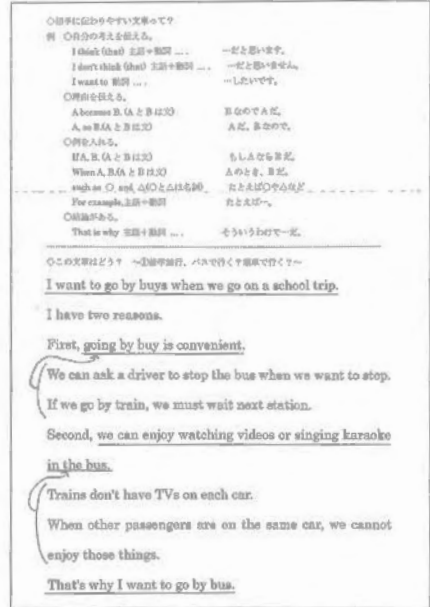


図3 文章の構成の分析用シート

理由として十分なもの

- ・世の中の人々が共通してもっている常識、価値観、普遍的な物事に基づいていること
- ・たとえその意見に反対している人であっても理解できる内容であること

理由として不十分なもの

- ・個人の感情、心情に基づく内容
- ・真実かどうかわからないあいまいな内容

(2) 視点②スモールステップで「話すこと」・「書くこと」に慣れ、よりよい表現活動につなげる

1年生や2年生前半でのスピーチ活動やテーマ英作文では単文での表現が主であったが、本単元で学習する接続詞を用いると複文での表現が可能となり、生徒の話す英語が生徒の日常話している日本語の表現に近づくことになる。例えば、過去に経験した事実について感想を述べる、理由をつけて考えを表すなど、より豊かかつ自然な表現にすることが可能になってくる。そこで、接続詞を用いた表現に慣れ親しませることと相手に納得してもらえるように「話すこと」・「書くこと」をねらったトピック設定をする必要がある。実際に活動を行ったトピックの例をいくつか挙げる。

- ・夏と冬、どっちが好き？ ・お弁当と給食、どっちがいい？
- ・制服と私服、どっちがいい？
- ・都会と田舎、住むならどっち？
- ・修学旅行、バスで行く？電車で行く？
- ・夏に行くなら海？山？

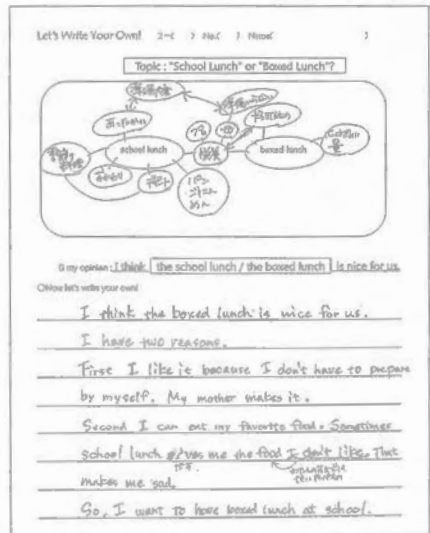


図4 トピック対話・英作文のシート

全てのトピックについて、話す活動と書く活動の両方を行うことはできなかった。しかし、話す活動の後に書く活動を設定すると英作文が進む生徒が多かった。話す活動では、トピックを与え、イメージマップを書かせた。対話が進むようにアイデアをたくさん挙げさせるのがねらいである。それをもとにペアで対話した後、実際に文を書きおこす活動を行った(図4)。英作文をする中で生徒が自分で自身の対話中の発言を振り返って文法上の誤りを訂正して書く姿も見られた。また、ペアの相手の発言で、自分も賛同できることを書く生徒もいた。授業後ペアのシートを見比べてみると、相手の話す内容を聞いて理解して(受信)、さらに例を加えて自分の考えとして表す(発信)生徒がいたことがわかった。

(3) 視点③ 意見文の分析を通して「話すこと」・「聞くこと」を生徒同士で高め合わせる

段階を踏んで自分の考えや思いを「話すこと」・「書くこと」に慣れ親しませてきたが、ここまではペア内でのやりとりが主であった。そこで、グループでの意見文の分析を行うことによって「話すこと」・「聞くこと」を高めさせる、つまり生徒一人一人の発信力の向上を目指した活動を行った。グループ内で発表し合うことに慣れ、最終的には学級での英語弁論大会のようなより多くの人がいる場でも自分の考えや思いをわかりやすく伝えることができるようにと意図した活動である。

この活動における生徒の意見文のトピックを、教科書本文で問題として取り上げられている『みどり公園を新しく駐輪場にするか、みどり公園を公園のままに維持するか』とした。生徒は自分自身がみどり市の市民であると仮定して、自分はどちらの立場なのか、またなぜそう思うのかを相手に伝わりやすいスピーチにするという活動を設定した。生徒は自分の意見を駐輪場推進派か公園維持派のどちらか表明し、自分の主張をこれまでの学習から考えたわかりやすく・相手に伝わりやすい文章で書いた。自分でチェックして人前で話す練習をしたあと、グループ内で順番にICレコーダーに自分のスピーチを録音した。そして、録音したスピーチをグループで分析し、話の内容についてよりよい文章構成となるように言語面・表現面の両方から練り直した。音声を聞く際に図5・6のようなワークシートを使用した。ディクテーションシートは友達のスピーチを聞きながらそのまま書き取ることによって、スピーチが可視化される。

そのスピーチに理由があるかどうかの確認だけでなく、文法やスペリングの誤りを生徒同士で訂正し合うことができた。また、スピーチチェックシートによって、わかりやすく・相手に伝わりやすい話し方について意識することができた。

このディクテーションシートとスピーチチェックシートをもとに、グループ内でお互いのスピーチにアドバイスし合った。アドバイスをもとに意見文を書き直したい生徒は必要な内容を書き足したり、文の順を入れ替えたりしていた(図7)。グループ内でお互いの意見文を聞き、書き取ることを通して、友達が書いた複数の意見や考えの中から説得力のあるものを選択した後、内容的



図5 ディクテーションシート

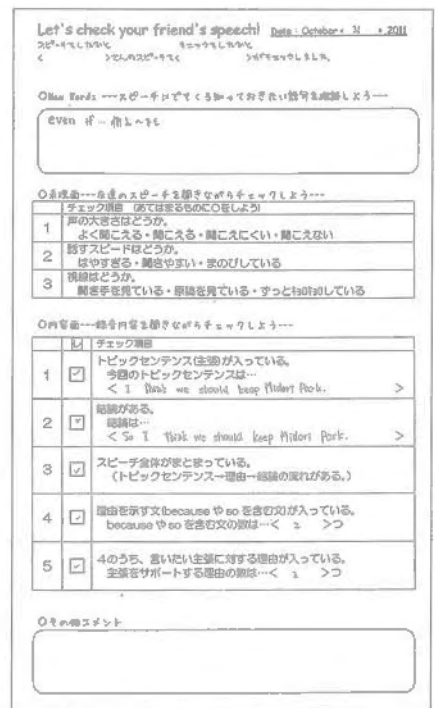


図6 スピーチチェックシート

にまとまりのある文章の構成にしたり、スピーチに出てきた英文に説明や具体例を付加したりするなど、相手に理解されやすい文章にする効果があったと考える。録音した自分の英語の音声を聞く機会は、ほとんどの生徒にとって初めての経験だったようだ。とても恥ずかしそうに聞いていたが、自分で自分の発音や話し方を客観的に聞くことによって、改善点が具体的に見えていたようだった。グループ内でお互いに単語の発音を確認し合う姿や、なかなかスムーズに話すことのできない文を繰り返し練習する姿が見られた。

グループ内でわかりやすい・相手に伝わりやすい表現について話し合ったことについて、各グループから有用であった情報・表現をホワイトボードでまとめたものを発表させ、学級全体で共有した。生徒一人一人のスピーチが録音された音声と、それぞれのワークシートに書かれた文字という2つの別ものが繰り返し確かめることが可能なものとなって残った。これらを利用して、各グループで気付いたことをホワイトボードにまとめた。このグループワークの後、学級全体で話し合いの内容を共有する時間を設けた。お互いの気付きを共有することによって、自分の気付かなかった視点を得ることができ、自分自身の考えをよりよい表現で発表することに役立てることができたと思う。

- ・結論を先に言ったほうがいい。
- ・理由が不十分であると相手に伝わりにくい。
- ・経験したことを入れると説得力がある。
- ・話すスピードが速すぎるとよくわからない。
- ・メモや原稿ばかり見ていては伝わりにくい。

以上のようなことや、この単元以前に行ったスピーチ活動をふまえて気を付けたいことと合わせて、書き直した意見文を使ってスピーチをする際に、表現面で自分が目標としたいことをそれぞれに選択させたのちに、学習の終末に再度スピーチを行った。

- ・声の大きさ・スピードに気を付けて話す
- ・伝える相手とアイコンタクトを取りながら話す
- ・自然なジェスチャーを入れて話す

自分のスピーチがどれくらいわかりやすく伝わりやすくなったかを、録音しておいた最初のスピーチと聞き比べた。録音した音声は個人のふりかえりの材料となり、発音やイントネーションについて、また話すスピードなどについて自分自身が課題と感じていたことが聞き比べのポイントとなった。最初のスピーチと比べると、理由をサポートする具体的な例が増えたことで意見文の内容自体が充実しただけでなく、発音をはっきりし、強く主張したいところは強調して話すことができていたなど、自分自身の表現の力の伸びを実感できた生徒も多くいた(図8)。

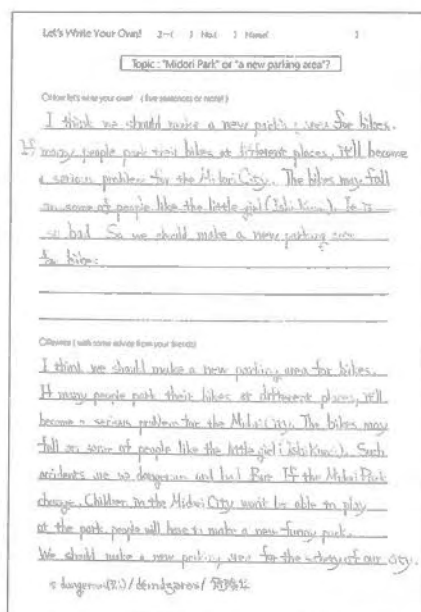


図7 アドバイス前(上半分)・後(下半分)の意見文

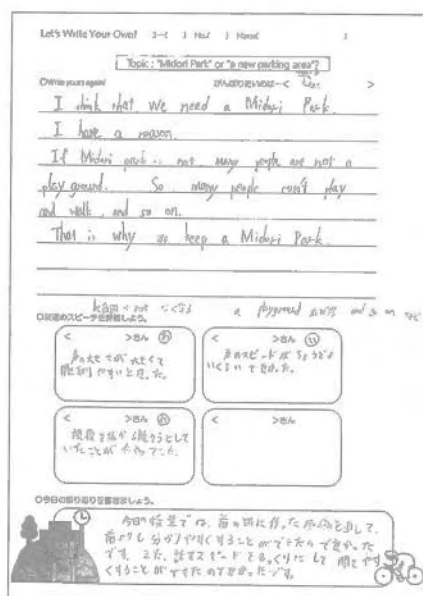


図8 スピーチの評価とふりかえり

3. 成果と課題

(1) 成 果

次の作品は、自身の経験をもとに、英語学習について自分はどのように考えるかについて述べた生徒のスピーチである。3年時の校内英語弁論大会で本スピーチを発表した。

The Importance of Learning English

Have you ever thought about why we have to learn English? When do you feel that? And what's the purpose of your learning? To get a high score on your tests? Or, to get good academic results? I learn English to expand my opportunities. Maybe some of you say "we don't have to learn English. It's OK if we can't speak it because we live in Japan." But it's wrong. In Japan, some companies have decided to use English. And I think that will expand when you are grown-up. So you must learn English even if you live in Japan. And if you can speak English, you can communicate with so many people around the world!

I'd like to tell you about my impressive encounter. Last summer, I met a Japanese-American boy, called Derek, who is from Los Angeles. He visited Japan as a member of the fourth generations' basketball team, which is called the Yonsei Team. The purpose of the team was to enjoy sightseeing, have some basketball games, and exchange cultures with Japanese students.

Derek stayed in my home for four days, and we went to some sightseeing spots, Izumotaisha-Shrine, Matsuejo-Castle and so on. He looks like a real Japanese, but he can't speak Japanese at all. So we, my family and I had to use English.

We couldn't communicate very well at first, but our conversation became gradually better day by day. Thanks to communicating in English, the encounter became impressive for me and for him. Now I'm exchanging e-mails with my friends who are on the Yonsei Team. Of course we use English.

My experience shows the unlimited possibilities. Today, English has become the world language. Many people, who aren't native speakers of English, can speak it. If you have a good command of English, you can expand the chance of encounters. I think it's very important in your life.

Learning English can expand your possibilities. How wonderful it is! When you notice that, you will certainly want to learn English.

なぜ英語を学ぶか考えたことはありますか？いつそれを感じますか？そして目的はなんですか？テストでいい点を取る？もしくは良い評価を得る？僕は自分の可能性を広げるために英語を学んでいます。もしかしたら「英語なんて学ぶ必要ない。日本に住んでいるんだから、話せなくてもいいじゃないか。」と言う人もいるかもしれませんが、でもそれは違います。日本の会社の中には、英語を使っている会社もあります。そしてそれはあなたが大人になる時にはさらに広がっていると考えられます。だから日本に住んでいても英語は学ばなければならないのです。そしてもし英語が話せれば、世界中のとても多くの人々とコミュニケーションが取れるのです！

僕の印象的な出会いの話をして。昨夏、ロサンゼルスから来たデリックという日系アメリカ人の少年に出会いました。日系四世のバスケットボールチームの一員として日本を訪れたのです。チームの来日目的は、観光、試合、日本人との文化交流でした。

デリックは4日間僕の家泊まり、僕たちは出雲大社や松江城などの観光地に行きました。彼は日本人に見えますが、日本語は全然話せません。僕たち家族は英語を使わなければなりません。はじめはあまり上手くコミュニケーションが取れませんでした。日を追うごとによくなっていきました。英語でコミュニケーションしたことで、出会いは印象的になりました。今、四世チームの友達とはメールのやり取りをしています。もちろん英語です。

僕の経験は、無限の可能性を示しています。今日、英語は世界的な言語になっています。英語を母国語としない人も英語を話せるのです。英語が堪能であれば、出会いの可能性も広がります。これは人生においてとても重要なことだと僕は思います。

英語を学ぶことで、可能性を広げられるのです。なんて素晴らしいことでしょう！あなたがそれに気づいたとき、必ずあなたは英語を学びたくなるでしょう。

この生徒は、2年生の段階で身に付けた意見のやりとりの仕方や相手に伝わりやすい文章表現の能力を基礎として、3年生でも自分の意見を言う・書く活動とその共有化を図る活動を継続して行った結果、校内英語弁論大会において、中学校3年間の学習で身に付けた表現力や文章構成能力をいかして、自分の主張を聴衆に訴えかけている。「なぜ英語を学ぶのか」という多くの生徒が一度は考えたことのある疑問に対して、自分の知識や経験から、社会における英語という言語の必要性や、それを学ぶことによって自分自身の可能性を広げることに役立つという自分なりの答えを見つけている。私はこの生徒のスピーチを通して、今後は「英語ができる」生徒を育成するだけでなく、「英語を通して何かを感じ取る、考える」ことのできる生徒や「英語で何かができる」生徒を育てていかなければならないという思いを強くした。

(2) 生徒の表現活動を向上させるための今後の課題

① トピックの選定

この研究を進める授業では、生徒に与えるトピックが二者択一のものばかりだった。このようなトピックを進めることは、どちら側の立場で主張をするかを決めて述べていけばよいので、発信者にしても受信者にしても話題が予測可能で負担が少ないという利点がある。しかし、トピックによっては、イメージマップでアイディアを書き出してもペアで同じような内容になるというような単調な表現活動になり、自由な表現が生まれにくいという弊害もある。生徒が意欲的に自ら発信したいと思うような表現活動に取り組むことのできるトピック選定が重要である。

② 生徒相互の英文チェック

生徒が書いた英文を生徒同士でチェックさせるという活動を初めて試みた。お互いにチェッ

くし合う中で、自分が何を伝えたいと思ってその文章を書いたかをどの生徒も熱心に友達に伝えていた。友達のスピーチを聞く・書き取った英文を読む上で、スピーチチェックシートは意見文の内容が充実しているかどうかを考えるひとつの目安となった。しかし、英文の正しさやその文中で使われる単語の適切さについて生徒同士で判じることが難しかった。他者の表現したものを読んだり聞いたりして、伝えたいことを正確かつ適切な方法で表現しているかどうかを判断するにはやはり基礎・基本の定着だけでは足りない部分もあるということがわかった。

③ 教師の英作文の添削

今回のように、スピーチ原稿や自由英作文を生徒に課すときに、教師はどの程度までエラーコレクションとして介入してもよいかという課題が残った。平成23年度島根県学力調査における自由英作文の解答類型のための正答条件では内容に誤解を生じない限り、つづりの誤りや文法的な誤りを問わないとしている。生徒の考えや思いについての表現作品であるので、内容についてどの程度まで踏み込んでもよいかが決めにくい。文法的に正しくなくてもその意図が伝わればよいとするのか、あくまでも文章を文法的に正しく、適切な表現にしてからでないといふ前で発表するに足りないと考えるのか。

英作文の添削・修正が生徒の表現能力の向上に効果的であるかどうかという研究では、「学習者は指導者に修正をしてくれるように望むが、修正を受けても必ずしも理解していない」ということや、「指導者が学習者の意図を理解しないで間違えて修正している場合がある」という事例が挙げられている。日々の授業で生徒が本当に伝えたいことを自分で伝えることのできる力を養うことができればそれが最もよいのだろうが、生徒が考え抜いて助けが必要になったときに適切な支援ができるようにエラーコレクションの指針をもっておく必要がある。

参 考 文 献

- ・中央教育審議会(2008)『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)』
- ・林 桂子(2011)『MI(多重知能)理論を応用した新英語指導法 個性を尊重し理解を深め合う協同学習』くろしお出版
- ・文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 外国語編』
- ・大井恭子編, 田畑光義・松井孝志(2008)『パラグラフ・ライティング指導入門—中高での効果的なライティング指導のために—』大修館書店

(いわさき かおり 英語科 iwakikaori@edu.shimane-u.ac.jp)